

## ジョージ・エリオットにみる科学の受容と懐疑

— 『ミドルマーチ』 医師リドゲートのテクストを読む —  
その1

福永 信哲

We aim at clarifying how scientific world view and its methods are penetrated into the text of *Middlemarch*, and how scientific way of thinking and language contribute to changing the structure and style of the English novel. With this sense of awareness in view, we try to make clear how George Eliot attempts to reconcile the conflict between her cherished Christian outlook and terminology with the method of verifying hypotheses through experiments. Among the author's fictional presentations, we find that a heated discussion between biblical language and physiological, psychological one is evident in the protagonists' portraits. For an example of this, we take up specific passages of Lydgate's delineation, and analyze how the novelist explored an innovative method of enlarging the dimension in character portrait.

Keywords : 聖書批評, 自然法則, 実験科学, ロマン派的物質主義, 心の科学

### 序

『ミドルマーチ』 (*Middlemarch*, 1871-72) (以下, *MM* と略称) には, 科学の発想と語彙が登場人物の性格描写のテクストの隅々にまで浸透している。個人と共同体の, あるいは個人と個人の, 相互依存の生きたネットワークを動的に捉える眼は, 作品創造の原動力として機能している。絶えず変化流動する人間関係のダイナミズムをプロセスのままに描く問題意識は, 必然的に視点の多様性となって作品の構造の中に生きている。作品世界を生きる個々の人物は, 過去という奥行をもった立体地図のなかに位置づけられ, その生き様と価値は相対化される。

さらに, 作品総体で相対化する地図の奥行を深めているのは, ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) が *MM* を創作した時 (1869年から1872年) と描かれた時代 (1829年から1832年前後の数年) の時間的隔たりである。ほぼ40年の時の経過を経て振り返られるイングランドの過去の姿には, その

間の時代精神の変化が微妙に反映されている。エリオットは, 小説創作に乗り出す1856年までには, ヨーロッパ時代精神との対話を糧として文芸批評の道を行っていた。自らの子ども時代に当たる1832年前後の歴史のはざまの時代を顧みる作家の目には, 当代の最先端の知識と洞察が生きている。これらは, 作家の代理人としての語り手の歴史的想像力として, *MM* のテクストの隅々に浸透している。これが語り手の言説にアイロニー (ものの見かけと実態との落差を明敏に察知する感受性) を添えることになり, 作品の言語に深い陰影をもたらしている。

語りの手法に表れる時代精神との対話が *MM* のテクストに陰影を添えるありようは複雑微妙で, 一筋縄では捉えきれない。その多様な相の一端を, 作品テクストの言語事実によって裏づけるのが本論考の趣旨である。とりわけ, 作家の科学的世界観との対話は, 彼女の最後の2作品たる *MM* と『ダニエル・デロンダ』 (*Daniel Deronda*, 1875-76) (以下, *DD*

と略称)では円熟した芸境に達している。これは、主な批評家の一致した見方である。<sup>1)</sup>では、科学的世界観と科学の方法は、MMの構造と人物描写にいかにか反映しているのであろうか。また、この方法がイギリス小説の性質に何をもたらすことになったのであろうか。この問題を掘り下げるうえで、好個の素材を提供しているのが、MMの登場人物のうち、ドロシア(Dorothea)、カソーボン(Casaubon)、バルストロード(Bulstrode)、リドゲート(Lydgate)であり、DDではグエンドレン(Gwendolen)である。

特に、医師リドゲートの科学的世界観と探求方法は、シャトルワース(Shuttleworth)によれば、作家の伴侶ルイス(Lewis)とエリオットの実験科学に関する共同研究の成果が反映したものであるという。(22-3)ビア(Beer)は、ルイスとエリオットの科学の問題意識にロマンティズムの遺産を見ている。宇宙自然に「一つの命」が生きているとみるロマン派の見方がヴィクトリア朝に至って、命の起源と相互依存の探求へと継承され、これがMMでは創作原理に高められたと。命の起源と相互依存の問題意識(ダーウィン(Darwin(1809-82), 644)は、広く社会と文化のありようにも及んだ。ひいては、日常言語の科学的意味合いと科学用語の日常生活における含みへと関心が深まり、これがMMへと結実したという。(144)

MMにおけるリドゲートの性格描写が注目されるのは、彼の科学者・医者としての視野が、人間関係の相互依存のダイナミズムを凝視する語り手の言説にあまり及んでいない点にある。さらに興味深いことは、彼の理想主義が挫折するプロセスには、科学的世界観に対する作家の矛盾した見方が反映していることである。エリオットの科学に対する見方には肯定と懐疑の複雑なゆらぎがある。これをリドゲート描写のテキストに具体的に跡づけることも本論考の目的である。

## I. 科学と宗教の和解としての聖書批評

19世紀中葉から後半にかけて、ヨーロッパ時代精神の特徴は、超自然的宗教としてのキリスト教の教義が科学的世界観の挑戦によって根本から揺らいだことにある。神の啓示としての聖書が無謬神話のヴェールをはがされ、人類の体験的真実を記録した歴史の書として批評の俎上にのぼせられた。これがドイツロマン主義に触発された聖書批評の見方である。イギリスでもこの時代思潮は、19世紀初頭から中葉にかけて、ドイツ文芸に通じた詩人と批評家によってもたらされた。コールリッジ(Coleridge,

1772-1834)、ワーズワース(Wordsworth, 1770-1850)、カーライル(Carlyle, 1795-1881)を源流とするロマンティズムの世界観は、聖書を現代人の科学的教養に堪えるように再解釈し、その体験的真実を現代生活に蘇らせようとするところに、その要諦があった。テニスン(Tennyson, 1809-92)、マシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822-88)に代表される宗教的不可知論(Agnosticism)への傾斜は、信仰への心情的共感をもちながら、知性は批評精神に従おうとする系譜の知識人を生み出した。彼らに共通する感受性は教義よりも直感、想像力を尊ぶものであった。子どもの感受性に立ち戻り、因習化した制度や習慣を解体し、自然からのインスピレーションと内発性と詩の復権に、生きる知恵を再発見しようとした。<sup>2)</sup>

エリオットは、こうした時代精神の申し子であった。国教会の信仰共同体に生を享けながら、少女期から思春期まで福音主義の熱烈な信仰を抱いていた。彼女の福音主義信仰は、一つには生来の多情多感な天分に由来する、因習的な宗教に対する反骨心の表現という側面があった。だが、彼女の器の大きい知的天分と想像力は、福音主義の禁欲的理想主義が、みずからの潜在的能力にたがをはめる含みのあることを早くから直感していた。1841年、彼女はチャールズ・ヘネル(Charles Hennell)の*Inquiry Concerning the Origin of Christianity* (1838)に出会い、これが契機となって「ドイツ高等批評」(German Higher Criticism)の問いかけた聖書の歴史主義的批評に自己発見の契機があることに気づいたのである。<sup>3)</sup>

エリオットが聖書の世界観と言葉を自家薬籠中のものとする一方、その心酔者の陥りやすい教条主義から脱却することができたのは、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、イタリア語を主とする語学の豊かな天分によるところが大きい。特に、ドイツ語とラテン語の本格的な鍛錬は、彼女の聖書批評精神を知識としてばかりではなく、皮膚感覚にまで磨きあげるのに多大な貢献をした。シュトラウス(Strauss)の『イエス伝』(*The Life of Jesus*, 1835) (ドイツ語版からの英訳, 1843-46)、フォイエルバッハ(F Feuerbach)の『キリスト教の本質』(*The Essence of Christianity*, 1841) (ドイツ語版からの英訳, 1854)、スピノザ(Spinoza)の『エチカ』(*Ethics*, 1677) (ラテン語版からの英訳, 1854-56年)などの翻訳は、ヨーロッパ語の起源と発展についての洞察をもたらしたばかりでなく、原語の習熟を通して古典との親しい対話が彼女の心に息づくほどのものであった。

アーマース (Ermarth) によれば、多様な言語の鍛錬によって、エリオットは個々の言語の単一的視点を相対化する視野を身につけた。これによって、多様な観点から複雑な現実をさながらに捉える眼と思考と感情のバランス感覚を身につけたという。(35-8) ヨーロッパ言語の文法システムを相対的に捉えなおす姿勢と、公式や教義に還元されないダイナミックな真理把握の方法への関心は、聖書批評の素養によってエリオットの作家生活の基盤となった。こうして培った脱虚構的な想像力 (レヴィン (Levine), 31) は *MM* の言説に生命的特質と機能を添え、その性格描写に曖昧で多層的な解釈可能性をもたらすこととなった。それゆえ、読者は作品の言語と向き合うとき、解釈行為への参加を促され、みずからの心が映し出され、複雑な地図に位置づけられたと感ずるのである。

## II. 聖書批評と小説テクストの文体

エリオットの小説言語に対する見方は「芸術の形式にかんする覚書」(“Notes on Form in Art,” 1868) に、その一端が明らかにされている。そこにロマン派詩人から継承した言語観がうかがい知れる。それによると、人体の輪郭は内部器官の総和の表現ではなく、個々の細胞が独自の働きをしつつ、複雑に相互依存している。部分に何らかの変化が生じれば、その影響は他の部分にも及び、全体もこれに応じて変化する。一つの全体がまた外部と交流しつつ、内部環境と呼応して形を自由に変える。(358) 芸術の表現手段としての詩も、これと本質的に同様の働きをしている。「生きた言葉は関係しあう意味の血液循環によって養われ、これを使う人間の感受性と思考の相互作用によって音楽となる」(359) という。ここにみる命の営みとしての言語観は、エリオットが聖書批評から受け継いだ、宗教と科学の和解を試みる問題意識から編み出したものである。そこに、ロマンティズムの有機的生命観 (organicism) と科学的世界観にみる命の歴史的・空間的連鎖観が分かちがたく結びついている。これがエリオットの小説言語の基盤になっているのである。

デーヴィス (Davis) によると、「心の科学」は、エリオットと彼女の同時代の知識人にとって死活的に重要な探究領域になった。彼らの生きた世紀は、西洋人の「心」観に根本的な変化が起きた時代である。精神生活は長く哲学論争と科学的観察の対象であったが、19世紀後半に至って、この分野は生物学と実験科学の探究領域となった。人間の心は、哲学と神学の問題であると同時に、自然界の他の現象と同様に、科学研究の正当な対象となったのである。

科学は、物質界と精神世界を結びつけることにより、人間が自己を理解し、描写する新しい方法となった。これが、エリオットのように、心を描くことに関心が深い小説家には、豊かな想像領域を切り開く武器になった。ダーウィンとその同時代人は、こうした時代状況によって新しい問題に直面することになった。人間の心を物質界の一部とみなすと、それは伝統的な見方で想定されていた宇宙の中心たる地位を失う危機に直面した。心が自然の有機的生命の不可欠の部分だとすると、それは他の動物同様、肉体内部のプロセスの感化を受けることを意味する。人の精神もまた、環境条件と他の生命体との相互依存の影響を受けていることになる。エリオットの心の描写にも同じ問題が横たわっていた。彼女は、絶えず人間の心と肉体のつながりに目を向け、このつながりに由来する倫理的に肯定的側面を基盤にして、新しい霊性を樹立した。その一方で、精神が科学では捉えきれない闇の領域を残していることを熟知し、科学的対象把握の方法に懐疑の念を捨てきれなかったという。(4-5)

科学と進化論の影響により「心の科学」の視野が広く社会・文化現象に及んだ19世紀後半の時代精神を、エリオットは身をもって生きた。長年の聖書講読により培った宗教的想像力と情緒を生き生きと保ったままで、科学の見方と言葉を、人間の生きざまの描写に生かす言語実験をやり遂げたのである。*MM* は、この実験の最前線とみてよい。デーヴィスの指摘する、人間の心と肉体のつながりに由来する、倫理的に肯定的側面とは、霊肉の生き生きした交流は命の充足をもたらすという認識である。これはエリオットが、青春以後、スピノザ (Spinoza) と聖書批評の知見によって導かれ、共感を深めた境地である。一方、肉なる自己が宿命的にもつ自己中心性と盲目性の自覚は、子ども時代以来、彼女の個性に深く根ざしていた。これらの相矛盾する人間観の葛藤は、エリオットの小説の中核にある。この矛盾と和解の試みは、彼女の小説の歩みと符合するとみることができる。では、この矛盾・葛藤が *MM* のテクストにどう表れているか、具体的に検討する。

## III. プロットの性質の変化

*MM* は、自然と人間の相互依存ネットワークそのものが小説の主題になっている。これによって、関係の網の目を貫く自然法則ないしは道徳律があまねく働いていることが明らかにされる。この法則が人物の自我の動きによって浮き彫りにされる構造もっている。自然界に進化と退化があり、死と再生が繰り返されるように、人物はその行動によって、

あるいは道徳的成熟の道を歩み、あるいは道徳的隘路に陥り、時に破綻を招く。この法則は、自然界とその一部たる人間の霊肉にも等しく生きている、というのがMMの核心にある見方である。

この見方は作品冒頭の「序曲」に示唆されている。“Who that cares much to know the history of man, and how that mysterious mixture behaves under the varying experiment of Time, has not dwelt, at least briefly, on the Life of Saint Theresa,” (人間の歴史に熾烈な興味を覚え、この神秘的に調合された存在が、変化・流動する時の実験のもとで、いかに行動するかを知りたい人で、少なくとも一時期、聖テレサの生涯を振り返ってみななかった人がいるだろうか。) <sup>4)</sup> ここには、人間の精神と肉体を自然の有機的部分として不可分一体の存在とみる観点がある。人間を「神秘的な素材の調合」とみる見方には、肉なる存在が自然法則の支配のもとにあることが暗示されている。「時の実験」とは、自然の大いなる働きが、時の経過とともに因果の連鎖の中で結果を産みだすしくみを連想させる。「人間の歴史」もこの文脈では、悠久の地球的時間の奥行でみられている。この見方は、人間を「万物の霊長」とみる伝統的なキリスト教の不文律から人間を解き放ち、他の生物と同様、自然法則の絶対的な支配に服する存在へと格下げする視座の転換を宿している。

人間を自然の営みの一部として捉えなおすナチュラル・ヒストリーの見方は、エリオットが聖書批評から学んだ中核的な小説作法であった。その方法は、必然の法則を自然と人間の係わりあいの中に観察し、記録することが目的であった。ところが、19世紀後半の1860年代と70年代に至って、進歩する科学の探求方法が、広く社会・文化のありようを変える含みを持つようになったのである。ピアは、ティンダル (Tyndall, 1820-93) を援用しつつ、エリオットが小説において行った実験について語る。自然科学が想像力を枯渇させるかのような危惧の念を抱く人もいるかもしれないが、事実上、科学と想像力重視の文化 (the culture of the imagination) は相照らすことができる。原子や分子や振動や波動は、眼に見えず、耳で聴くこともできないが、ただ想像力を働かせることによってのみ直感されるのだ。この不可視、不可触の世界を、顕微鏡と望遠鏡を用いて人間の理解可能な領域に位置づけることができる。これら科学的機器の助けによって可能になった仮説構築の想像領域をロマン派的物質主義と呼ぶことができる。これが空想的な営みに新しい権威を付与したという。(141-42)

ピアは、実験科学の方法がもたらした文化の変容について、続けて言う。19世紀小説のプロットは解釈という行為の根本的な形式になった。この意味のプロットは、隠されたものが明るみに出され、既知の知識の外延部に広がる闇に潜む意味を包含し、筋立ての完成をもって、意味が説明可能領域に持ちこまれることを意味した。このような意味あいにおいて、プロットは仮説の性質を帯び、因果関係を解き明かす語りは、アイデアを語ることから真理を語ることへと地位を飛躍させた。この働き高度化は、ベルナル (Bernard, 1813-78) の実験による仮説検証ないしは、ダーウィンのアナロジー (異質な現象の中に同質な働きや道理を見抜く眼) と歴史 (地球的時間) によってもたらされたという。(151)

以上、ピアの見解は、MMテキストの語りの構造と性格描写に深い示唆を投げかけている。この文脈でみると、リドゲート描写のテキストには、作品の構造そのものに関わる意味あいが感じとれる。

He [Lydgate] longed to demonstrate the more intimate relations of living structure, and help to define men's thought more accurately after the true order. . . . What was the primitive tissue? In that way Lydgate put the question—not quite in the way required by the awaiting answer; but such missing of the right word befalls many seekers. (15: 166) <sup>5)</sup>

彼は、生命体のさらに密接な依存関係を論証し、人間の思いをあるがままの順序に従って、より正確に捉えることに何がしかの貢献ができればと考えた。原初的組織とは何なのか。リドゲートはこう問い掛けた。正解が待ち受けているかのようなやり方ではなかった。むしろ、真実を穿つ言葉が見つからずにもがくことは多くの探求者の宿命なのだ。

科学的真理探究の方法は、必然的に人間探究に暗示を与えずにはおかない。エリオットのように、宗教的感受性と哲学的真理への関心を兼ね備えた作家においては、人間の内的世界を凝視する手段として科学の語彙と方法を用いることは、ごく自然な試みであった。“demonstrate the more intimate relations of living structure” という語句は、人間の心を描く方途として、その生理的基盤に眼を向けることが必須の条件であるという認識を示している。“What was the primitive tissue?” という問い

は、ビシャー (Bichat, 1771-1802) からベルナルへと継承された実験生理学の根本命題であり、近代医学の出発点を画する問題意識であった。その意味するところは、生命活動を極微の細胞の働きから捉え直すということにあった。命の神秘の隠れ潜む闇を手探りするリドゲートの姿勢は、特定個人の性格描写の域を超えて、語り手の、語り、関係づける (relate) 問題意識を偲ばせる。ものの本質を射貫く言葉を求めて、沈黙の暗闇をまさぐる彼の想像力は、人間を凝視する語り手のものでもあることを想起させる。

#### IV. 自然と、人間の精神世界を貫く法則

リドゲートの医者之眼に仮託された実験科学の方法は、エリオットがMMを構想する頃までには、人間を探求するうえで含みもつ科学的視点の意味あい気づいていたことを窺わせる。実験生理学の方法は、肉なる人間の生理と心理が、わかち難くつながっていることを教えてくれる。命の営みを細胞レベルで捉えようとする眼は、人間の精神的な営みにも、その法則性が生きていることを想像させずにはおかない。ルイスとの共同研究で培ったエリオットの生理学・心理学的直感は、リドゲートの方法を描く一節に跡を留めている。

... the imagination that reveals subtler actions inaccessible to any sort of lens, but tracked in that outer darkness through long pathways of necessary sequence by the inward light which is the last refinement of Energy, capable of bathing even the ethereal atoms in its ideally illuminated space. . . . he was enamoured of that arduous invention which is the very eye of research, provisionally framing its object and correcting it to more and more exactness of relation; he wanted to pierce the obscurity of those minute processes which prepare human misery and joy, those invisible thoroughfares which are the first lurking-places of anguish, mania, and crime, that delicate poise and transition which determine the growth of happy or unhappy consciousness. (16: 183-84)

(リドゲートは、) いかなるレンズにも映し出

せない微妙な働きの正体をつかむ、そういう想像力を求めた。エネルギーの究極的な洗練といえる内的な光によって必然の法則の迂遠な道筋をたどり、外界の闇を手探りしてゆくのである。このような光は想像力によって視覚化された空間を浮遊する霊妙な原子ですら思い描くことができる。 . . . 彼は、探求者の眼そのものといえる、骨の折れる創造的な営みに惚れこんでいた。暫定的に対象を心に思い描き、一層真実に肉薄する関係把握 (語り) へと修正を繰り返してゆくやり方である。彼は、これら絶妙なプロセスの闇を照らしたいと願った。人間の苦しみと喜びの基盤ともなり、苦悩と熱狂と犯罪が兆し、隠れ潜む場である、あの眼に見えない通路を捉えたかった。あの微妙に均衡と変動を繰り返さず働き、これこそ人間の幸不幸がよってきたる所以となる働きなのだ。

ここには、自然をあるがままに観察するナチュラル・ヒストリーの問題意識に実験科学の方法が加わったことが示されている。人間の五感で捉えうる現象の背後に生命の神秘がある。これを、想像力を駆使して思い描き、実験によって裏づけてゆく方法である。この試みは、私たちが命の神秘に対していかに無知であるかという自覚から出発している。わずかな既知の現象を手掛かりにして、心は想像領域に遊ぶ。インスピレーションがいつこからともなく、闇を手探りする探求者に訪れる瞬間である。

これを捉えようとする文章には、心踊るロマンが行間になじみ出している。おのずから、言葉に絵画的なイメージの相互照射が感じられる。“the imagination that reveals subtler actions,” “inward light,” “ideally illuminated space,” “provisionally framing its object” は、眼に見えない世界を心の目で可視化する想像的思考を想起させる。漠とした直観が仮説となり、これを裏づけようとする問題意識が導きの光となる。“outer darkness through long pathways of necessary sequence,” “pierce the obscurity of those minute processes” これらの言い回しは、自然界の神秘の働き・プロセスが必然の法則に従って営まれていることを明らかにしている。真理が隠れ潜む闇を手探りするには、感覚を研ぎ澄ますことが要求される。心を無にして対象に溶けこむとき、直感が訪れる。それは、忍耐強い冷徹な事実認識の果てに与えられる、想像力の飛躍の瞬間である。

想像力をエネルギーの洗練された働きとみる見方

には、生理と心理を一つものとみる直感がある。肉体と精神を二元論的にみるキリスト教文明の伝統的な観点から、心身一如の発想への転換がここにある。“bathing the ethereal atoms”という措辞は、命が液体のように流動しているイメージを連想させる。同時に、精神活動が物質的基盤を基にしつつ、どこかで肉ならざる世界へ飛躍する暗黙の認識を示している。感情の動きを“pathway,” “thoroughfare,” “lurking place”という空間的イメージで表現している発想も、単なる比喩を超えて、感情と肉体の有機的相互依存を示している。この一節に端的にみえるように、エリオットは聖書講読で培った人間観を、キリスト教とは異質な言葉で捉え直そうと試みている。

リドゲートの性格を構想する作家の眼には、レンズを覗きこむ科学者のイメージが生きている。レンズが映し出す世界は、日常生活を営む人間を、生物としての根本的事実のままに捉え直す視座の転換を迫る。人は、草木や動植物や微生物と同じ生物として、人智を超えた働きによって生かされているという見方である。

... character too is a process and an unfolding. The man [Lydgate] was still in the making, as much as the Middlemarch doctor and immortal discoverer, and there were both virtues and faults capable of shrinking or expanding. (15: 166-67)

性格もまたプロセスであり、生成発展するものである。この男はミドルマーチの医師としても、不滅の発見者としても発展途上にあつた。彼の美点も弱点も萎えしほむか成長するか、いずれかの可能性を秘めていた。

性格を変化流動する「プロセス」とみる見方は、生物界の有機的相互依存を見通している。この法則の働くところ、人は悠久の時の流れのなかで寸刻の命を賜り、固有の役割を果たしては去ってゆく。ここでは、個々の人物の美德も弱点も人間社会の規範という以上に、生物として生き延びるための知恵の視点から眺められている。生命の法則に適えば成長し、これに従わなければ衰退が待っている。“Nothing in the world more subtle than the process of their [the multitude of middle-aged men's] gradual change.” (15: 161) (人生を長く生きた人々が経た、ゆっくりした変化のプロセスほど

に微妙なものが他にあるか。) 人がゆっくりと変化するプロセスには本人もあずかり知らぬ神秘的な力が生きている。この神秘を探究することこそ、作家の人間探究の核心がある。リドゲートの人生行路を描き起こす章にそっと差しはさまれた語り手の感慨は、MMの芸術的意図を示唆する認識とみてよい。

## V. 作家の科学観の反映としてのリドゲート

医学・生理学の研究者として志を抱き、同時に患者の癒しという社会的善を目指すリドゲートの性格像は、語り手の「時の実験」の対象として焦点化される。彼は、作家の科学的世界認識の代理人として、積極的可能性を一方で担いつつ、もう一方で、科学の内包する本質的弱点をも体現している。そこに、エリオットの科学に対する複雑微妙な評価の綾が暗示されている。

科学的真理探究の方法と言われることは、自己を対象から切り離し、客観的な観察と分析を加え、時に実験をとおして仮説を検証し、法則を発見し、応用して、無知の闇から人間を救うということである。ところが、科学の大きな可能性を熟知する作家の問いは、それが人格完成の道を歩む光として充分であるかどうか注がれている。「主を恐れ敬う心は知恵のはじめ」(「詩篇」111: 10)<sup>61</sup>とみる聖書的人間観を深く身につけたエリオットは、人間が自らの知恵を頼む危うさを熟知していた。対象から自己を切り離し、真実に迫る方法が、人生智として人を成熟に導くかどうかについて、懐疑的な姿勢は終生変わることはなかった。自己の見識を頼む心が、現実の人生のここかしこに隠れ潜む罠に足を取られ、ものを見る眼が曇り、自己執着の闇に沈む道理を作家は直視し続けた。

先に触れたように、人格を流動するプロセスとみる見方は、作品の有機的構造のなかに組みこまれている。MM 第15章は、この人間観に基づいて構想されている。この章でリドゲートの医学・生理学者としての見識が体系的に導入されているが、フラッシュバック(人物の過去を遡って焦点化する手法)で、一つの暗示的なエピソードが描かれている。それは、彼の女性観と結婚観を確信的な信念にまで打ち固めた過去の体験である。1832年パリ留学中、27歳の彼は、解剖学研究に精励しているさなか、観劇を楽しむ機会があった。その折、夫婦の痴情のもつれを演じる官能的な女優が、実際に夫でもある役者を刺し殺す挙に出たのを目撃した。これにロマンティックな情念を触発された彼は、成熟した女のエロティシズムの虜となり、夫を殺すに至った動機

を、直接本人から探ろうとした。その過程で、男女のエロスの底知れない奈落を垣間見たのである。ほどなく惑溺のほとぼりから覚めた彼は、以後、エロスの盲目的な世界を予感しつつ、これに背を向けたのである。

But he had more reason than ever for trusting his judgment, now that it was so experienced; and henceforth he would take a strictly scientific view of woman, entertaining no expectations but such as were justified beforehand. (15: 171)

彼はみずからの判断に経験が加わったことで、これを頼む気持ちが強くなった。今後は女性を厳密に科学の眼でながめ、あらかじめ根拠が確かめられる場合をのぞき、女性に期待を抱くことは慎みたいと思った。

ここには、色恋の何たるかを体験的に知る語り手の風刺眼が、アイロニーとなって行間に滲んでいる。わが心と肉のうちに、科学的知見ではいかんともしがたい業の深さを感じとった彼は、自己の知恵を頼む気質的判断を打ち固めた。「曇りない心で想像力を研ぎ澄ます」科学研究の足手まといになるものは、心から追い払ったのである。これによって、彼は命の神秘の世界から聞こえてくるささやきに耳を閉ざした。これに代えて、自らのはからいと段取で人生を切り開こうとする生きざまに固執するようになった。

## VI. 恋愛描写にみる科学とロマン派的審美主義の葛藤

前節に述べたような過去からの行きがかりを背負ったリドゲートは、町の良家ヴァインシー家の愛娘ロザモンド (Rosamond) と出会う。二人のお互いへの思慕が、周囲の複雑な思惑にもかかわらず結婚へと結実する瞬間を、語り手は語る。その瞬間は、ロザモンドがうっかり落とした鎖縫いのネックレスを、どちらからともなく拾おうとして眼が会った瞬間だった。

... At this moment she was as natural as she had ever been when she was five years old: she felt that her tears had risen, and it was no use to try to do anything else than let them stay like water on a blue flower or let them fall over her

cheeks, even as they would.

That moment of naturalness was the crystallizing feather-touch: it shook flirtation into love. Remember that the ambitious man who was looking at Forget-me-nots under the water was very warm-hearted and rash. He did not know where the chain went; an idea had thrilled through the recesses within him which had a miraculous effect in raising the power of passionate love lying buried there in no sealed sepulcher, but under the lightest, easily pierced mould. (31: 335)

・・・この瞬間、彼女は五歳の少女さながらにはからいがなかった。いつの間にか涙がこみあげてきていた。青い花に露が溜まるように涙が浮かんだままにするにせよ、いまにも頬を伝わり落ちようとする涙をそのままにするにせよ、ほかになす術はなかった。

はからいなき瞬間は羽根でそっと触れるだけで結晶させる瞬間であった。一瞬のうちに戯れの恋は愛に変わっていた。水底にゆらめく忘れな草をながめていたこの夢多き男は、熱い血潮と向こう見ずな性向をもっていたことは思い起こしておこう。彼はネックレスがどこに行ったか知らなかった。心の奥底にある予感がゾクッとするような戦慄とともに兆した。この予感、封印された墓の中にうずもれている訳ではなく、ほんのそっと触れるだけでこわれてしまう鑄型のすぐ下にうずいている情熱的な愛の力を呼び起こすのに奇跡的な効果があった。

忍ぼうとすればするほど募ってくる思慕は、人を利害・打算の世界から、はからいなき世界に放り出す力である。命の神秘が心身を捉えて、いずこへとも知れぬ運命へ運び去る瞬間である。おのずから湧きあがる感情の流れは、浮世のしがらみと打算を突破させる。エロスのほとぼしりは、人を行動に突き動かす神秘の働きである。これを、“crystallizing feather-touch” という想像的な暗喩が示唆している。「結晶化」のイメージは、肉体の生理的な働きが感情と連動して、心に劇的な変化をひき起こす命の神秘を想起させる。“no sealed sepulcher” の例にみられるように、頭韻を踏んだ古雅な語句を、否定語で意味を反転させると、却って鮮烈なエロスの

ほとぼしりが読者の想像力を捕らえる効果を生んでいる。

ロザモンドの涙は、感情が液体のような動きをし、これを理性ではどうすることもできない人間的真実を、視覚的イメージによって浮き彫りにしている。青い瞳に溜まった涙が今にもこぼれ落ちようとする瞬間は、「青い花に溜まった露」の直喩が暗示している。無心のうちに訪れる感情の動きは、これを見つめる相手の感覚的陶醉をも連想させる。“natural(ness)”は、幼な子のイメージも響きあって、はからいなき命の燃焼を偲ばせる。これが訪れるとき、人は生の衝動を解き放たれ、束の間の心の自由を得る。こうした無私の感情は、これを向けられた相手の琴線に触れずにはおかない。“an idea had thrilled through the recesses within him”これは、恋慕の情をほどほどに楽しもうとしていたりドゲートの遊び心が本当の恋心へ変わった瞬間を捉えている。心の中に無意識の闇が広がり、言葉が及ばぬ沈黙の世界で行動への意志が芽生える瞬間である。“lying buried there in no sealed sepulcher, but under the lightest, easily pierced mould.”この空間イメージは、彼の強壯な肉体そのものに基盤のあるエロスの情念が、相手の一見些細とみえるしぐさにも激しく反応するさまを思わせる。この点描には、作家自身も恐らく意識して表現している訳ではない、言葉のイメージの有機的照らしあいがみられる。反復のある韻律美は、言葉が豊かな蓄積の泉から無意識に流れ出たものであることを想像させる。

## VII. 結語

本論考では、リドゲートの性格描写にはエリオットとルイスの共同研究の成果が色濃く反映していることをテキストから跡づけてきた。これを簡潔に言えば、実験科学の方法と言葉が人物の内面描写に浸透し、イギリス文学の伝統的な文体や美意識に修正を加えたということである。

「その2」では、リドゲートの結婚生活の苦しみを描くテキストに焦点を当て、彼の高い志が潰えてゆくプロセスを辿る。これを描く作家の文体に、生理学・心理学的洞察と宗教的想像力とが葛藤していることを裏づけてゆく。

さらに、彼の人生の挫折を凝視する作家の眼は、科学の限界を示唆していることを明らかにする。エリオットは、人格完成への歩みとして「主を恐れ敬

う心」の重要性を認識していた。この宗教的人間観が『ミドルマーチ』構想の基盤になっていることを論考する。

## 註

- 1) Shuttleworth, chap. 1, 7; Beer, chap. 5; Davis, “Introduction;” Levine chap. 1 参照。
- 2) Houghton, “Ennui and Doubt” (64-77) 参照。
- 3) Willey, (207-08) 参照。
- 4) 作品テキストの日本語訳は拙訳である。なお、工藤好美・淀川郁子訳『ミドルマーチ』（1975年）に示唆されるところが多かった。以下、同じ。
- 5) 括弧内の数字は、本論考で使用したMMテキストの章とページ数を示す。
- 6) 英語聖書の日本語訳は拙訳である。以下、同じ。

## 引用文献

- Beer, Gillian. *Darwin's Plots*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Cogan, Donald. ed. *The Revised English Bible*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped Country*. London: Ashgate, 2006.
- Eliot, George. “Notes on Form in Art” *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 355-59.
- . *Middlemarch*. Ed. and introd. A.S. Byatt. New York: Oxford UP, 1999.
- . *Daniel Deronda*. Ed. Graham Handley. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- Ermarth, Elizabeth D. “George Eliot and the World as Language.” *George Eliot and Europe*. Aldershot: 1997. 33-43.
- Houghton, E. Walter. *The Victorian Frame of Mind*. New Haven: Yale UP. 1957.
- Levine, George. *Realism, Ethics And Secularism: Essays on Victorian Literature and Science*. Cambridge: Cambridge UP. 2008.
- Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge: Cambridge UP. 1984.
- Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies: Coleridge To Matthew Arnold*. Cambridge: Cambridge UP. 1980.